

## キーワード2 共感的理解

Dさんは、学校行事の際にどのグループにも入れなかったことを契機に休みがちになった。担任は、「それぐらいのことで、学校に来られないのは弱い人間だ。もっとつらいことは、今からたくさんある。たくましくなければ生きていけない。」と厳しく指導したが、Dさんの状況は相変わらずであった。

しばらくしてから、教育相談担当のE教諭の呼びかけで、Dさんが相談室を訪れた。

E教諭：「今は、どんな気持ちかな？」

Dさん：「学校に行かなくちゃとは思うけど、できない自分にイライラして…。」

E教諭：「そうか。行けない自分にイライラしちゃうんだね。クラスの話は、今どんなふう to 思ってるのかなあ？」

Dさん：「クラスには、居たい気持ちもあるけど、相手にされないし、なんでっていう思いもあるし…。」

E教諭：「友だちに相手にされなくて寂しいような、悔しいような気持ちもあるんだよね。」

Dさん：「ええ…（涙ぐむ）。でもこうして話してみると、私が人のことを気にしすぎているのかなとも思う。」



教師と生徒の関係は、ややもすると指導的になりがちです。この事例の担任の態度は、そのような例と見て取れます。生徒の主体的な問題解決や個性・能力の開発を図るためには、共感的理解が大切です。

### 共感的理解から生まれること

事例では、教育相談担当のE教諭に共感的に理解されたことによって、Dさんに信頼感が生まれ、自己表現ができるようになっていきました。その後Dさんは自分自身を見つめ、「人のことを気にしすぎるから、かえって不自然な態度になってしまうのかもしれない。もっと自然の自分を出そう。」と自己理解を深め、問題解決の糸口を自分自身で見つけるようになっていきます。

### 共感と人間関係

互いに共感できたと感ずるには、人間関係が不可欠です。また、共感の体験をもち理解しあうことで、人間関係はいっそう深まっていきます。

ただし、共感的理解とは、相手の間違っただ言動を認めたり、相手の言うことをすべて正しいと認めることではありません。

例えば、怒りが抑えられず暴力を振るった子供に対して、暴力を振るうほどの怒りを感じた気持ちを、子供の立場で理解をするのは大切です。しかし、その行動を正しいと認めることはできませんし、しっかりと指導しなければなりません。

「先生は私の考えが正しいと言ってくれた。」ではなく、「先生は、私の気持ちを分かってくれた。」と子供に感じさせることが大切です。